

ご挨拶



拝啓

早春の候、先生方におかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。さて、この度、福岡県眼科医会、ノバルティス ファーマ社の協力により、「第13回九州眼科アカデミー」を開催する運びとなりましたので、ご案内いたします。今回は平成として最後の開催となりました。皆様ご存知のとおり、平成の30年間で新しい医療機器や薬剤が登場し、また、新しい手術手技などが登場したことにより、眼科診療は目覚ましい進歩がございました。それに伴い、治療成績も向上し、QOVの重要性も高まっています。本セミナーでは、毎回、各専門領域におけるオピニオンリーダーの先生方をお招きし、眼科領域の研究および臨床に関する最新の情報を提供して頂いております。今回は、眼炎症関連を福島敦樹先生、眼形成関連を野田実香先生、緑内障関連を富田剛司先生、網膜硝子体関連を本田茂先生に講演をお願いしました。本セミナーへ参加される先生方の診療に、少しでもお役に立つことができればと考えております。ご多用とは存じますが、ぜひともご出席賜りますよう、お願いいたします。

敬具

代表世話人 坂本 泰二 (鹿児島大学 教授)

PROGRAM

開会の挨拶 坂本 泰二 先生 鹿児島大学大学院 歯学総合研究科 先進治療科学専攻感覚器病学講座 眼科学分野 教授

17:05~17:45 演題1 眼炎症疾患の診かた、考えかた

座長 | 内尾 英一 先生 福岡大学医学部眼科学教室 主任教授



演者 | 福島 敦樹 高知大学医学部眼科学教室 教授

眼炎症疾患を理解するためには免疫の基本を知っておく必要がある。本講演では、1)免疫の基本、2)免疫と眼炎症疾患、の2つを課題として話を進める。免疫とは病原体を排除するために存在すると考えられている。病原体を排除する機序として、好中球などが中心として働く自然免疫と、リンパ球が関与する獲得免疫に大別される。それぞれの働き方、そして自然免疫と獲得免疫の関連性について述べる。眼炎症疾患にはアレルギー性結膜疾患を代表とする前眼部疾患から、ぶどう膜炎に代表される後眼部疾患まで様々な病気がある。前眼部疾患についてはアレルギーから感染症まで、幾つかの病気を例にあげて免疫応答の役割を述べる。後眼部疾患に関しては、動物モデルを用いた研究をもとに発症機序を理解してもらおう。つづいて、自然免疫が関与する代表としてパーチェット病を、獲得免疫が関与する代表として原田病について述べる。本講演で各疾患の病態形成における免疫応答の役割を理解していただければと思う。

1990年 高知医科大学 卒業
1993年 米国立眼研究所免疫学部門 留学
1994年 高知医科大学大学院 終了 (医学博士)
1996年 高知医科大学眼科学教室 助手
2000年 ジョージア医科大学 分子医学遺伝学研究所 留学
2004年 高知大学医学部眼科 助教授
2008年 高知大学医学部眼科 教授 現在に至る

17:45~18:25 演題2 明日からできる眼形成

座長 | 吉富 文昭 先生 太宰府吉富眼科医院 院長



演者 | 野田 実香 先生 慶應義塾大学医学部眼科学教室

眼瞼疾患は、眼科医が日常診療で多く遭遇する疾患であるが、見た目に大きく関わるため参入しにくい分野でもある。見た目より機能的役割の大きい手術については、すべての眼科医に習得していただき地元で貢献していただきたい。本講演ではいくつかの手術について解説をおこなう。高齢者の眉毛下皮膚切除術はデザインが非常に重要である。内反症は訴えが強く、需要が多い手術である。小児の先天内反症、皮膚が障害されている小児の霰粒腫の処置についても言及する。

1995年 慶應義塾大学医学部 卒業
慶應義塾大学医学部眼科学教室 入局
2001年 聖隷浜松病院眼形成眼窩外科
2003年 慶應義塾大学医学部眼科学教室
2009年 北海道大学病院眼科 助教
2015年 慶應義塾大学医学部眼科学教室 専任講師
2018年 眼形成手術専門フリーランス医師 現在に至る

18:35~19:15 演題3 眼底画像解析を用いた早期緑内障の診断

座長 | 園田 康平 先生 九州大学大学院医学研究院眼科学 教授



演者 | 富田 剛司 先生 東邦大学医療センター大橋病院 眼科教授

緑内障の診断を眼圧測定と視野測定で行っていた時代は終焉を迎えている。臨床的に検出できる視野障害が明確になる前に、すでに緑内障性変化が眼底に出現することは広く知られてきた事実である。それでもなお、緑内障の前視野野の診断がこれまで名人芸であったのに対し、最近では画像解析法の導入などにより比較的容易にその診断が可能になってきている。本講演では、画像解析手法を用いた早期緑内障の診断のノウハウとアプローチの仕方を議論する。

1980年 岐阜大学医学部 卒業
1984年 岐阜大学医学部附属病院 助手
1986年 岐阜大学医学部附属病院 講師
1986年 米国タフズ大学医学部眼科 留学
1992年 フィンランドヘルシンキ大学眼科 留学
1999年 東京大学医学部眼科 准教授
2007年 東邦大学医療センター大橋病院 眼科教授 現在に至る

19:15~19:55 演題4 加齢黄斑変性とpachychoroid spectrum diseaseの分子生物学的病態

座長 | 坂本 泰二 先生 鹿児島大学大学院 歯学総合研究科 先進治療科学専攻感覚器病学講座 眼科学分野 教授
江内田 寛 先生 佐賀大学医学部眼科学教室 教授



演者 | 本田 茂 先生 大阪市立大学大学院医学研究科視覚病態学 教授

加齢黄斑変性(AMD)は我が国を含む先進国の主要失明原因であるが、そのphenotypeは欧米人とアジア人と異なる部分が多い。例えば欧米人にはドレーゼンを伴うAMD症例が多く、アジア人にはポリープ状脈絡膜血管症(PCV)が多い事は良く知られた事実であるが、その分子生物学的機序は今なお不明である。最近では脈絡膜厚の増加(pachychoroid)を伴う黄斑変性疾患群をpachychoroid spectrum diseaseという新しい疾患概念として考える流れが登場し、今まではAMDの範疇になかった中心性漿液性脈絡網膜炎(CSC)がPCVと関連している可能性も示唆されている。CSCも欧米人よりアジア人に多い疾患であり、脈絡膜の肥厚を特徴とするが、本当にPCVと同じ範疇の疾患なのであろうか?本講演ではAMDと類似疾患の病態の共通点と相違点について最近の臨床遺伝学研究的結果も踏まえて考察する。また、病態を考慮した治療選択によって無駄な治療を避け、効率的なAMD治療ができる可能性について述べる。

1991年 神戸大学医学部 卒業
1992年 神戸大学大学院医学研究科
1998年 University of California Davis 留学
2001年 北野病院 副部長
2004年 神戸大学大学院医学研究科 助手
2008年 神戸大学大学院医学研究科 講師
2014年 神戸大学大学院医学研究科 准教授
2018年 大阪市立大学大学院医学研究科 視覚病態学 教授 現在に至る